

ムーンメモリア・ロストノイズ  
六話・出立

雨和七瀬

ルークは慣れた動きで宿に入り、三階まで上がる。ブランカの泊っている部屋の扉を叩くと、鍵が開く。

「おはようございます！」

ブランカは荷物を全て詰めた鞆を背負って、出発の準備を終えていた。ブランカの元気な声にルークはひとまず心配事が一つ減ったことに胸を撫でおろす。

「早いな、睡眠は十分にとったか？」

ルークは部屋の中を覗く。寝具などは整えてあるものの、枕が頭の形に窪んでいた。他の場所も片づけてあり、ルークは比べるのは良くないと思いつつ、ユノの普段共に調査をする中での振る舞いを思い出して、目の前の光景に感動するのだった。

「はい、バッチリです！」

ブランカはもう一度部屋を回り、「忘れ物もないです！」と報告する。

二人が階段を下りると、受付に立っていた男が近づいてくる。

「ご出発ですね、ブランカ様。お気をつけて」

「はい、ありがとうございます！」

男が頭を下げると、ブランカもお辞儀をした。

「ユノも外で待ってる。行くぞ」

ルークは扉を開けた玄關番に銀貨を渡すと、いつもと同じように頭巾を被った。しかし、既にユノが人々の視線を集めており、この行いが無駄であることを悟った。

「よっ、ブランカ！ 旅の揃えも似合うな！」

ユノはブランカに駆け寄って肩に手を回す。ユノの腕の中にあるブランカは、褒められたことでニコニコとしていた。

「えへへ。おはようございます、ユノさん」

周囲の町民は、朝から宿の前で誰かを待ち、出てきた少女を愛でる騎士の姿に見惚れるなり眉を顰めるなり、様々に反応していた。ここを通るような町民にとって本来は、朝は暇で退屈なものであったために、こんな些細なことでも劇を見るように楽しむのだ。

ルークはそんな彼らの視線を遮るように、被っている頭巾を手前に引き寄せる。

「……全員揃ったわけだし、出発するか！」

ユノはルークの方を向き、周りにも聞こえるように話すが、ルークは首を横に振る。

「食事をとってから出た方がいい、今回は時間をかけても構わないから、徒歩で行く」

ユノはルークの言葉に「マジ……？」と眩きながら目を輝かせる。

「今回は調査だけでなく討伐もするのだから、お前にも万全でいてもらわないと困る」

ユノは満面の笑みを浮かべる。

「助かるぜ〜！ そういうことなら、朝飯どつかで食うか！」

すると今度はブランカがユノの服の裾をつまみ、気を引く。

「私、スコーンが良いです。この前ルークさんにおすすめてもらったんですよ！」

ルークは先日ブランカにスコーンを勧めた張本人として、実用面について少し考えることにした。

「スコーンなら持ち運びもできるな……出発の時間を早められるし、多めに買えば携帯食を長持ちさせられる。包んでもらう方がよさそうだ」

ブランカは「多めに」という言葉に反応し、コクコクとうなづく。しかしユノは、口を尖らせて抗議の意を示した。

「え〜……腰を落ちて食べてえよオ〜」

「でも、スコーンのこと考えたら、お腹が空いてきちゃいましたあ」

「……そうだな」

ユノの抵抗もむなしく、腹の虫が鳴り出した二人はユノを置いて菓子店へと歩き出した。

店に着くと、店員が焼きたての菓子を棚に並べる手を止めて出迎えた。

「いらつしやいませ、お早いですね」

ルークとブランカ、そして多数決に負けて仕方なく付いてきたユノは挨拶をすると、ブランカが真っ先に店員に話しかける。

「町の外に出るので、持っていける朝ごはんを買いに来ました〜」

ブランカはこの数日で店員と打ち解けたようで、店員は朗らかに「そうなのね〜」と返し、今度はルークの方に視線を向ける。

「どちらまで向かわれるのですか？」

「まずはセイイ村に行く。徒歩で数日かかるはずだ」

店員は彼の話を頷きながら聞くと、三人をスコーンが置かれた棚へ案内する。

「スコーンはいかがでしたら？ 長持ちしますよ」

「わあ……食べてみたかったです！ どうですか、ルークさん！」

ブランカはキラキラとした目をルークに向ける。ルークも緩みそうになった口元をキュツと締め直しながら頷く。

「そうだな。数日分となると……足りるな。七個入った包みを四つ、用意してもらえるか」

店員は「かしこまりました」と言うと、机の裏から袋を取り出し、丁寧にスクーンを詰めていく。その間にルークは銀貨を数枚、袋から取り出して銭受けに並べる。

「ああ、ここに居ると腹が減るなあ。なあルーク、ついでにクッキーの詰め合わせ買って良いか？　もう、限界……」

ユノは棚から手のひらほどの大きさのクッキーが何枚も入った袋を手に取り、スクーンの袋の横に置く。

「……仕方ない」

ルークはため息を漏らすも、もう一枚銀貨を置く。ユノはその様子をまじまじと眺める。

「いつも思うけどさ、いつも多めに金出すよな」

「品物だけでなく、この店の様々な要素に対して相応の対価を払うだけだ」

ルークがそう答えると、店員はいつものようにその少しだけ多い銀貨を受け取り、深々とお辞儀する。

「いつもありがとうございます。ルーク様のご期待に応えられるよう、今後も精進いたします」

「……そうしてくれ」

ルークは少しだけ微笑むと、大量のスクーンが入った袋を受け取って鞆に全てしまう。しかし、いくらでも物が入られるように魔法で細工された鞆は、何も入っていないかのようなすっきりとした外見を維持していた。

「それでは、お気をつけて」

店員はまた深く頭を下げる。ユノは手を振り、ブランカはお辞儀を返し、ルークは会釈をして、店を出た。少し歩くと、ユノは早速クッキーの袋を開け、大ぶりな一枚を口に頬張る。

「おい、外ではもう少し行儀よく食べろ」

ルークはユノを窺めるが、ユノにいきなりクッキーを差し出され、言葉が詰まる。よく見るとブランカの手にもユノと同じように握られており、ルークは大人しく受け取った。ユノはルークがクッキーを黙々と食べる様子を見て、うんうん、とうなずく。

城下町を守る門までたどり着くと、門の前にはユノと同じ格好の兵士が立っており、ユノに気付くと手を振る。

「おーっす、ユノ。魔術師サンと一緒にすることは、また護衛の仕事か？」

「よお。今回は各地の討伐も兼ねてんだ。オレが居ない間の警備は任せたぜッ」

ユノが兵士の背をバン、と叩くと、兵士も負けじと「お前も、なッ」とユノの背を叩き返す。そして二人は声を上げて笑う。

「魔術師サンも、嬢ちゃんも気をつけてな！」

「はい、ありがとうございます！」

「ああ……そちらも励んでくれ。……ほら、行くぞ」

ルークは逃げるように足を速めて門をくぐった。ユノとブランカも彼を追いかけるように町の外へと駆けだした。

一方その頃。男は施設の階段を降り、魔法で閉ざされた扉の前に立つ。男は小さな杖を取り出し、錠前に書かれた魔法陣に鍵となる模様と文字を書き足すと、錠前が外れ、ひとりで扉が開いた。扉の向こうはこちら側と全く違う様相を呈していたが、男はそのまま奥に進む。壁が目の前にあるかと思えば道ができるのを何度か繰り返すうちに、円卓の間に辿り着いた。

「あら、もう帰って来たのね。遠くまでご苦労」  
男の視線の先には、彼の主が居た。

「……これくらい造作もありませんよ」

そうは言いつつも男は顔をほころばせ、期待の視線を向ける。主である女はそれを完全に理解していた。

「ふふ、欲張りね。優秀なあなたには、ご褒美だけじゃなくて次の仕事もあげようかしら」

手招きされるままに男は主の座る玉座に向かい、その手前で跪く。主は彼の頬を撫でる。その動作に男は顔を蕩けさせ、熱を帯びた視線で主を見つめる。

「……何なりとお申し付けください。僕はなんでもします」

女は男の言葉に微笑みで答える。そして足にすり寄る犬を抱き上げるように、男を立ち上がらせ、左腕で抱き寄せる。右手で空中に魔法陣を描くと、二人は影に呑まれ、どこかへと消えていった。

〈七話へ続く〉